

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo. 44(2017年2月号)◆

早いもので立春を過ぎ、春一番が吹く季節となりました。会員のみなさまはいかがお過ごしでしょうか。昨年以來、メディアの注目を集めていたトランプ米大統領ですが、就任早々、入国制限命令など世論を騒がせております。このような時代だからこそ、扇情的な言動に惑わされずに研究活動を続けていくことの重要性が増すように感じます。

『Intelligence』第17号は、3月末に刊行の予定です。18号の投稿原稿も募集しております。締め切りは、毎年9月末です。投稿をご予定の方は、事務局まであらかじめご連絡頂ければ幸いです。ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】最新の第14回ブログには、吉本秀子先生より「プロパガンダが生み出す『被害者→敵→生け贄のサイクル』」と題して、タイムリーな話題を頂戴いたしました。これまでのブログの題名と文章の一部がネットでご覧頂けるようになっています。ぜひこの機会にご覧ください。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第109回研究会】(1月28日(土)午後2時30分～5時30分)

・橋本理恵子氏(立教大学21世紀社会デザイン研究科博士後期課程)「琉米関係のあり方を探る—1950年代の新聞報道分析から—」は、ジャーナリズムと社会運動の観点から1955年の米兵による事件を地元紙『琉球新報』『沖縄タイムス』がどのように報じたのかを検討することで、1995年の少女暴行事件との類似性、連続性をも見出すことができるとのご報告でした。

・吉田則昭氏(立教大学社会学部兼任講師)「新聞販売史再考—メディア史の観点からの通史、個別史の可能性—」は、メディア史の観点から、新聞販売史の通史と、明治・大正期、戦時期、占領期、講和独立後の戦後期、の個別史を検討することで、新聞の発達過程の特徴を明らかにし、1970年代以降の50年を加えた「新聞150年史」のために、どのような史資料が存在し、何が記録に残されるべきかをご報告いただきました。

・フフバートル氏(昭和女子大学人間社会学部現代教養学科)「モンゴル映画史に見られる隠れたテーマ——「中国からの独立」」は、モンゴル最初のトーキー映画「モンゴルの息子」(1936)に始まる様々なモンゴル映画における「中国人」表象の分析を通じて、モンゴル革命の勝利、社会主義建設と近代化、ソ連との友好関係、封建主義・宗教批判など顕在的なテーマに隠れた言説として、中国に対する警戒または「中国からの独立」の要素があったことを指摘されるご報告でした。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●今後の20世紀メディア研究会は、3月18日(土)、4月29日(土)、5月27日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【第18回諜報研究会：加藤哲郎・春名幹男客員教授退任記念特別報告会】

(2月25日(土)午後2時30分～6時：早稲田大学3号館404号室) NPO法人インテリジェンス研究所理事の加藤哲郎氏、春名幹男氏の退任記念として両氏に「国際的インテリジェンス工作と日本」に関し最新の研究成果を発表いただきます。みなさまのご来場をお待ちしております。

【コラム：原点と現点——戦後民主主義を考える】

「花に嵐のたとえもあるさ。さよならだけが人生だ」、卒業式シーズンを控え、井伏鱒二の名訳で知られるこの詩を思い出す季節となった。過日、勤務先でも法学を担当された先生がご退職となり、最終講義が行われた。憲法学という馴染のない学問を専門とされるに至った経歴など、興味深いエピソードばかりであったが、その中でも「二つの『ゲンテン』」という言葉が強く印象に残った。研究者を志すきっかけとなった「原点」と、現在に至る「現点」の二つを指す。先生は青春期に触れた「戦後民主主義」思想が原点とのこと。省みて、自分の「原点」は何であったかを考えたところ、中井正一の次の言葉が想起された。

「私は、ある時期に、人類が全部愚劣であっても、それで人類の尊厳が汚されきったとは考えないのである」（「一握の大理石の砂」）。

「闘う美学者」とも称された中井は、苛酷な思想弾圧を経験してもなお、最後までこの言葉に見られるようなヒューマニズムを捨て去ることはなかった。戦後、国会図書館副館長に就任し、図書館建設を通じての文化復興途上、52歳の若さで中井はこの世を去る。こうした背景を考えると、死の二年前に書かれたこの言葉には「信じること」の強さも含意されているがゆえの美しさがあることに気が付く。「戦後民主主義」はおろか、「戦後」という言葉も遠くなりつつある昨今、日本社会の民主化の原点となった米国の混乱を伝えるニュースが続く。過激な言動で人心を不安に陥らせるトランプ大統領の出現ひとつで、「民主主義」の理念までを軽々に疑うことがあってはならない。この先もしばらく教壇に立つ近現代史の研究者として、4月からの指針を囚らずも考える時間となった。

[2月18日付 文責：鈴木貴宇]